
オフ会のジャンヌダルク

由一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オフ会のジャンヌダルク

【Nコード】

N5281Z

【作者名】

由一

【あらすじ】

現世に転生したジャンヌ＝ダルクは、ひきこもりを引退（？）し遂に自分のブログのオフ会に参加することになった。果たして会は上手くいくのだろうか？ ジル＝ド＝レイの正体は如何に？ 初の複数話構成。

大須への進軍

私は、ジャンヌ・ダルク。

かつて裏切りの炎によって焼かれた私だったが、数百年後の時を経て日本人「十字 まもり」に生まれ変わってはや１９年になる。

以前は人間にほぼ完全失望にきつていて、学校も行かず、ずっと家にひきこもっていた私だったが、１年ほど前にパソコンで始めたブログが大繁盛し、間接的ではあるが交流を持つようになった。色々な問題も起こったが、ブログの訪問者数は増え、遂にこの度オフ会を開く事になった。

知らない人のために説明するが、「オフ会」と言うのは、ネット上のみでの交流だった仲間達が実際に顔を合わせ、食事会等の交流をすることである。どんな感じなのかは、私も今回が初めてなのでわからないが、オフ会が盛り上がるかどうかは今回のオフ会を主催したジル・ド・レイの腕にかかっているだろう。勿論、私も会のメインに据えられるわけなので、ただ黙って食事を食べ続けるだけとはいかないだろうが。

とにかく人と会うのも久しぶりな上に、まったく未知の世界だ。目的の場所、大須に向う私は不安と期待が入り混じっていた。

鶴舞駅のあたりから続く長い坂を歩いて行く。外の景色すら久しぶりだ。太陽が眩しい。

オルレアンにいたころの太陽とは、何かが違うように見える。同じものはずなのに、いやに弱弱しく感じる。太陽は、私がない

間に何か困った事でもあったのだろうか？ 私の眠っていた間に、多くのものが目まぐるしく変わってしまった。そして、それについて説明してくれる神の声は存在しない。私は、ただそんな世の中に翻弄されるのを拒んで、籠の鳥となっていた。そんな私が今、遂に籠を飛びだして生暖かいコンクリートの地面の上に立っている。これは、正しい事なのだろうか？

使った事もほとんど無い携帯電話を覗き見ると、表示される時計は3時45分をさしていた。

開始まで十分に時間はある。私は、ゆっくりとその坂を登って行った。

いざ玉野屋（前書き）

オフ会会場へ向かうジャンヌⅡダルク（十字 まもり）。
メンバーは果たして集まっているのだろうか？

いざ玉野屋

ぶらぶら大須を歩く事20分。

玉野屋は大須観音の近くのちょっと目立たない場所にあった。
料亭の様な、なかなか古風な建物だった。かなり昔からあるのだ
ろう。

信楽焼か何かの、大きな狸の置き物が私を出迎えた。

果たして、本当にここで良いのだろうか？

不安だった。本当に、ブログに来てくれる皆は来てくれるのだろ
うか？

もし、ジルドレイ誰も来てくれなかったら、私は未来永劫人
間を信用するのはやめにしたい。一生、家の中でひきこもっても
いようかと思う。

入口は手動だった。

私は、何か重苦しい、まるで決戦前夜のような感覚でガラガラと
その扉を横にスライドさせる。

思わず瞑ってしまった目を開ける。

玄関は、人気が無かった。しかし、すぐにトタトタと足音が聞こ
えてきた。

「いらっしやいませ」

出てきたのは4〜50代の女性だった。

この店の女将さんか何かだろう。着物姿でちょっと威厳がある。まあ、ナポレオンが称賛したと言ったの私の威厳程では無いと思うが。

「えーと、お名前は？」

女将さんは優しくに名前を聞く。普通なら、今の名前を言うものだろうが、オフ会なのでそうはいかないのだ。現世の名前を言うわけにはいかない。だから、答えは勿論こうだ。

「……ジャンヌ・ダルクです」

言うしかなかった。明らかに変だけと言わざるを得ない。

神より賜りし神聖な名前なのだが、ここで言つと恥ずかしいのはなぜだろう？

恥じる事はない。恥じる事は無いはずなのに。おお……申し訳ありません守護天使様。このような私を見ておいでなら随分とお嘆きの事でしょう。

「ああ、くら・ピュセルを愛する会の方ですね！ どうぞこちらへ。」

私は啞然とした。

この女将さんは、私の名前にもC O S P Oで買ったアニメチックな衣装にも動じず、爽やかに私を部屋に案内するではないか。これには、まことに驚いた。少しばかり感心してしまった。悠然と私の前を歩く様もまた、どこか優雅だ。

案内された部屋は「十五夜」という名前だった。

お座敷で、座布団と机がおおよそ30人分程の為に並べられてい

た。そして、その机の一つに既に座って何かメモの様なものを見ている男性がいる。

多分、彼だろう。彼に違いない。

私は、やや硬い動きでその男性に近づくと、彼はさっとその場で立ちあがった。

ジル＝ド＝レイ（前書き）

オフ会会場に辿り着いたジャンヌ。
先に来ていた1人の男性に近づく……

ジル＝ド＝レイ

「こんにちは！ あなたは、もしや……」

「えっと、ああ……私が、ジャンヌ＝ダルクだ」

即座に気付くとは、さすが私も美処女或いは美少女だ。

まだ転生前の威厳も残っているのなら少なからず喜ばしい。しかし、そんな気持ちは表に出す事はしない。まずは、この男の素性を知らねばならない。

「君がジル＝ド＝レイか？」

「はい。お久しゅう、ジャンヌ様。昔と変わらずお美しいですな。」

「

変わらない事は無いと思う。いや、容姿は前世よりも上だと思う。それはさておき、この男の容姿だが……まあ、わかり易く言うと、相方が女子ボクシングを始めた、多人数アイドルグループ大好き、ナレーションもよくやるメガネの太ましいお笑い芸人にそっくりである。この男が本当にあのジルであるのなら、正直なところ転生に失敗したと言っただろう。しかし、本人の前でそんな事を言うのは失礼だから言うまい。それに、私は、顔で人を差別したりするほど器量の小さい人間では無い。平等に向き合うのが主義だ。冷静に肝心なところを確かめよう。

「まだ、君の事を信じたわけでは無い。君があのだらば、この問いに答えよ。本当にそうなら、きつと答えられるはずだ」

「はい、仰せのままに」

彼は騎士の様なポーズをとったが、まったく似合わない。

そもそも、何故にこんなキノコみたいな髪型にしているのだろうか？ 似合っていると思っているのか、それとも大きい顔を小さく見せるためか？ オルレアンにも似たような髪型の男はいたがあれはある程度流行していたからだ……色々と頭の中で詮索してしまうが勿論聞く事は無い。今はこの言葉を発して正否を確かめるのみだ。

「では、聞こう。ラバテラの花の香りは……？」

「我らの神鳴を神明呼びさまし、栄華の道を切り開く」

男は、迷いなく答えた。

かつて、戦の時にほんの一部で使っていた呼応式暗号を彼は正確に答えたのだ。

「……なるほど。どうやら、嘘ではなさそうだな。ジル」

「おわかりいただけただようで安心しました」

私達は手を取り合う。

はためからみたらコスプレ美少女と、お笑い芸人が語り合っている妙な光景なのだろうが、幸いまだ誰も来ていない。

「よもや、あなたが転生されているとは思いませんでした。再び会う事が出来て光栄にございます」

「お互い、変わったな。ジル」

ジルは本当に大きく変わった。まさに月とスッポン、ヴィーナスと紫式部だ。

昔は、なかなかヒゲの似合う男だった。今はやけに肌がツルツルテカテカしている。二ヒルな雰囲気は変わらないが、見た目と完全にミスマッチであり、動きや言動が全てショートコントのネタのように見えてしまうのが複雑である。ただ、勿論、それを笑ったりはない。そもそも、私はお笑い番組等でウケることはほとんどない芸人泣かせな人間なのだ。ちゃんとジルと分かった以上、昔の様に接する。

「君は、どうやって転生したのだ？　もしや、錬金術か？」

「おお、お詳しいようすな。ジャンヌ様」

「まあな。伊達にひきこもっていたわけではない」

「おお、流石は。そうです、私は錬金術によってこの世に転生いたしました。方法を言いますと長くなるので今は伏せておきますが……危険な賭けではありませんが、何とか成功したのですよ。ジャンヌ様は、一体どのような方法で？」

「わからぬよ。気がつけばこの体だったのだ。おそらくは、大いなる神によるものだと思うのだが……何も聞こえないのだ。あの頃聞こえた天の声が聞こえない。だから、今となってはただ、昔聞いた神の言葉を語ることしかできんよ。」

「むづ……なるほど。やはり、そうですね。」

「なんだ？　君は、何か知っているのか？」

「ええ、あなたとコンタクトをとったのはそこにもあるのですから」

「話してくれ。一体君は、私に……」

「ああ、この話は会の後にしましょう。他の人が来ましたよ」

そう言われて私は背を向ける。

いくつかの軋む足音が聞こえてきた。

そして、会が始まる（前書き）

ジル＝ド＝レイが本物であると確認したジャンヌ。
ほかのメンバーも次々とやってくる。

そして、会は始まる

会の始まる時間が近づくにつれ、少しずつこの部屋「十五夜」には人が増えて行った。

ひとまず、私はホツと胸を撫で下ろした。これだけ来てくれれば十分だ。

それにしても、予想外だったのはその面子の見た目だ。

最初、私はほとんどが20〜30代の若い男性ばかりかと思っていたのだが、以外にも年齢層は広く、女の子からおじいさんまでいる。私は、人を見抜く力には自信があったのだが、ネット上の発言から、その人間の素性を的確に推理することは残念ながら出来なかったようだ。そもそも、ジルがキノコおじさんだった時点で全く見抜けていない。ちよつと悔しい。

みんな次々と、ジルの名簿にハンドルネーム（ネットの中での名前の事）を言って、好きな席に座っていく。私は、それを正座しながらろくに挨拶もせず無言で見っていた。バレているかもしれないとは思いながらも、今はまだ1人の参加者を装っていた。

そして、はじまりの午後6時になった時には、席のほとんどは埋まっていた。

オフ会としても十分な集まりと言えそうだ。

時間が来たと分かるや否や、ジルは部屋の隅に立つ。
いよいよ開会なのだろう。皆の席には料理が置かれ、コップには
飲み物が注がれた。

「えー、皆さま改めましてこんばんは！ 本日は「ラ・ピュセル
を愛する会」にお集まりくださいまして誠にありがとうございます。
私が、今回のオフ会を企画させていただきましたジル「ド」レイで
ごす！ ジャンヌさんのブログにはいつもお世話になっております
！ 本日は司会進行を務めさせていただきますので、皆さま応援ヨ
ロシクお願いいたします！ 盛り上げて行きましょう！」

会場から、大きな拍手が起こる。歓声も少し起こった。
はじまりの言葉としてはまあまあといったところだろう。

「では、まず最初にブログの管理人であり今回の会の中心的存在
であるジャンヌさんにご挨拶を頂き乾杯の音頭を頂きたいと思
います。」

ええっ！？

私が最初なのか？ みんなが自己紹介した後では無くて私が最初
なのか？

「さあ、お願いします。」

「……」

私は、しぶしぶ席を立った。

視線はみんな私の方を向く。体が震える、心臓が高鳴る、妙に緊張する。

ひきこもりが長かったせいか、こういう状況に体も心もついて行かない感じた。

いや、何を言っているのだ私は？

私はかつて大軍を率いたあのジャンヌダルクだぞ？

数千数万の兵の前で快活に言葉を発したのを忘れたのか？

おおよそ30人。たかが30人だぞ。何を恐れる事があるか。

大丈夫だ。大丈夫。この程度どうということはない！

私は、きつと目に力を入れた。

そして、ゆつくりと川の流れの如く神に頂いた麗しき口を開く。

「みなさん、お集まりいただき、ありがとうございます。私が、くら・ピュセルの管理者、ジャンヌダルクです。沢山の方が、当ブログに来ていただいている事、まことにうれしく思っています。おかげで最近は、人間というものに再び期待感を持つようになってきました。コメントも、いつも有難く拝見させていただいております。返事に拙い部分があるかもしれませんが、大変感謝していると云う事がわかっていただけると幸いです。オフ会と言うものは初めてですが、今日はお互い、良い会にしましょう。では、大いなる神に対して、この会を開く事が出来た事に対して……ええと、乾杯！」

「かんぱーい！」

皆、コップを天高く掲げ、次にそれを他の人のコップに当てて鳴らす。

チリンと良い音が室内にこだました。

私はそれを聞いて、かつて戦いに勝った時の祝杯を思い出し、懐かしく思った。

ドキドキ自己紹介、私はただ傍観するのみ（前書き）

ジャンヌの、乾杯の音頭はなんとか上手く行った。
続いてメンバーの自己紹介に移る。

ドキドキ自己紹介、私はただ傍観するのみ、

「ありがとうございます！」

乾杯が終わると再びジルが司会を続ける。

さて、それぞれの飲みっぷりだが、一気に飲んだ人もいれば、ちよつとだけ口に付けただけの消極的な人もいて様々だった。こう言う所にも人間性は現れると思う。かく言う私は、炭酸の強いコーラを少しだけ飲んで、やめた。かつて戦いを共にした男たちは酒飲みの豪快な者が多かったが、それは国柄と言うものもあるかもしれない。それよりもまず、アルコールを飲んでいる人がこの会場にはほとんどいない。九州ならば結構な酒豪がいると言うが、どうやらそうだった人間はいなさそうだ。ここは中部地方だしな。まあ、未成年の私がこんな飲酒の事を考えているのは常識的に考えれば妙な話だと思うが、考えてしまったのだから仕様が無い。

「さて、それでは次に皆さんの自己紹介に移りたいと思います。そちらから順に自己紹介をお願い致します！ 名前は、ハンドルネームで結構です。」

ジルの手は、1人の気弱そうな男性に向けられた。

皆の視線に押されて、20代の髪の長い細身の男性は、まごまごして立ち上がる。

自己紹介って言うのが好きな人間って言うのはあんまりいないだろう、特に、自分に自信の無い人間にとっては苦痛だ。自分の事など語りたくないのに、こういった初対面の状況で語らなければならぬ。そこにはまるで、魔女裁判にかけられ、晒される無実の乙女に繋がる哀れみを感じてしまう。しかし、今の私はただ、彼の声に

耳を傾けるのみだ。

「あ、あの……<暗黒開闢魔王ルシファス>です……三重県から来ました。今日は、よろしくお願いします。」

なぬ！？

彼があのだ、威勢のいい挑発的発言を連発するルシファスだというのか！？

これは、驚いた。まったく、豹変とはこういう事を言うのだろうか。いつもは長いコメントを書き込むのだが、こと実際の自己紹介となると、言葉少なくあっさりと着席した。しかし、そのギャップを覚悟してここに来た勇氣は認めたい。良く頑張ったと、私は拍手を送った。

彼が出だした事で安心したのだろうか？

以降の自己紹介は、割とリラックスした感じになって行った。それにしても、みんな全然イメージと違う。<FOX>は、腰の曲がったお爺さんだし、<ドクター・くわ松>は医者じゃなくてIT関連の仕事してるらしいし、<メガネざる>は視力1.5だし、<ミルフィー>はムキムキのヘラクレスみたいな男だし、<Yシャツ君>はタートルネック着てるし、<なのっぺ大好き>は真面目そうなお坊さんだし、<やれ男>は、いつも3枚目をやっているがヤニーズ事務所寸前のイケメンだった。とりあえず、そんな彼らに私は心から拍手を送り続ける。勿論、他のメンバーも拍手を欠かさなかった。

「……ありがとうございます。では、次の方。」

「はい。」

そして半分くらいが終わった時、ある女の子の参加者の番になった。

私程では無いと思うが、なかなか可愛い顔をしている。栗色の髪の毛はすらりと長く綺麗だ。明らかに良い意味で浮いている。こんな子が、あのブログに来ていたのは意外だ。彼女っぽいコメントを残す人間は<ミルフィー>くらいしか思い当たらないのだが、ミルフィーは前述の通りだ。一体誰なのだろう？

「こんにちは。ええと、私は、<ぱくりまく朗>ですっ！坂^{さか}祝市^{ほろ}からきました！みんなと会えてとっても嬉しいです。今日は楽しくオフ会したので、よろしく願いします！」

なんと！

彼女が、あの<ぱくりまく朗>だったとは。

本日一番の驚きである。私は、思わず強く拍手してしまった。

癒し少女と和ませじいさん（前書き）

自己紹介も中盤……

ジャンヌはネットと現実のギャップに驚かされ続ける。
特に、<ぱくりまく朗>はカワイイ女の子だった。

癒し少女と和ませじいさん

<ぱくりまく朗>は、妙なヤツだ。

いつも私のブログに、短いコメントを多く残してきた。

大体は意味不明だ。最初に来た時のコメントは「うげーうげー」
って書いてあっただけだったし、「バナナ」とか「おっ〇いプリン」
とか下品なものも多い。その上、急に「死ぬ」だとか「死ぬ」だとか「首吊りたい」とか「手首切っちゃった」とかダークな発言まで
混ぜ込んでくる。繊細な心を持つ人間だったら、こんなコメントを
残したら気分を害するだろう。しかし、私はジャンヌダルクだ。
何事にも気丈に誠心誠意でコメントを返す主義だから、もちろん、
まく朗のコメントにも全て返事をしてきた。しかし、そんな私の誠
意に対しての反応は全く無く、文体も変わらずに書き込んできたの
で、てっきりイタズラ半分で、私のブログにちょっかいを出してる
のではと私は勘繰っていたのだ。だから、ここにまく朗が来たのは、
実に意外だった。しかも更に、あんな困った事を言いそうもない純
朴な感じの女の子と来たものだ。少なくともここにわざわざ来る以
上、私に対して何か感情的なものがあるには違いない。

結局その後も「予想外です」の連発で自己紹介は終わった。私に
ネットと現実の大きな差異を知らしめるには十分な内容だった。そ
して、食事の時間となったが、まだメンバーが打ち解ける様子はま
だ無かった。私も黙々と、お刺身をつまを醤油に浸けて食べる。そ
んな微妙なムードを打破したのは、急に席を立って武勇伝を語りだ
したハンドルネーム<FOX>の老人だ。

彼は、食べている皆の前で、笠松競馬で万馬券を当てた事やオイ

ルショックの時にスーパーのトイレで起こった事件、地元球団の低迷期の話など、長い年月で経験したどうでもいい体験を次々に話したわけだが、これが実に面白い。どうでもいい内容なのに、周りから笑い声が漏れる程にやみつきになる面白さなのだ。語り口は軽快、表情も生き活きとしている上に語彙も豊富ときていて、この老人はかの夏目先生の生まれ変わり或いは亀有からの使者ではなかるうかと私は思った。これほど周りに聞かせる事が出来る力はかつて多くの兵に神言を説いた自分ですら感心するに至る。これなら落語家の真打やら司会者やら何やらにでもなれそうなもののだが、話の内容上どうやらごく普通の人生を送って来たとなると、まったく才能の無駄遣いである。この武勇伝は、皆が食事を一段落するまで続いたが、これのおかげでオフ会はとても和やかになった。更にジルの後押しもあって、みんな徐々に話し始めるようになり、とても良い雰囲気になってきた。

私の近くにも、どんどんメンバーがやってきた。

そして、皆コップにジュースをどんどん注いでくれ、それを私はどんどん飲んだため、結果トイレに行きたくなかった。炭酸飲料も多く飲んだのでお腹も張ってちよつと苦しい。私とした事が、ちよつと不甲斐ない状態を晒してしまったが、人間と言うものは排出する生き物なのだから仕方あるまい。

トイレに行こうと部屋を出る。

がやがやと楽しい声が障子の隙間から漏れ聞こえた。

それを背に廊下を歩いていると、付いてくる足音がある。

振り返るとそれは、くぱくりまく朗く、略してまく朗だった。

真面目なんだかどうか（前書き）

トイレに行こうとしたジャンヌを、ぱくりまく朗が追いかけてきた。

真面目なんだかどうなんだか

「あ……ジャンヌさん。」

まく朗が恥ずかしそうに何か言おうとしたので、私はトイレに行く足を止めて事情を聞く事にした。

「うん？　どうかしたのか？」

「ええと、つれシヨンしようかなと思って……」

乙女にジュセルでもなれそうな清純な顔からどんな言葉が出てくると思ったら、連れシヨンなどという小中学生くらいしか使わない破廉恥な言葉が出てきたので、私は心の中で新婚さんをもてなす有名落語家ばりに椅子を転げ落ちた。勿論、心の中だけで表情は平静を保った。しかし、こんなに恥ずかしそうにしてくせに、連れシヨンなんて恥ずかしいワードを口にするあたり流石はまく朗だ。普通の人間じゃ無い事は間違いない。

断るのもかわいそうなので、私はしょうがなく、まく朗とトイレに向った。トイレは結局一つしかなかったたので、まく朗に先を譲ると、彼女はあつという間にトイレから出てきた。本当は、ただ付いて来たかっただけなのかもしれない。私が用事を終えた後も、彼女は外で待っていた。

「キレはよかったですか？　ジャンヌさん」

「ああ、わざわざ待っててくれたんだな。……もしかして、何か

言いたい事でもあるのか？」

「はい。実は、ジャンヌさんにお礼が言いたくて」

「お礼？」

「はい！ いつも私を気にかけてくれて、本当に、ありがとうございます！ ジャンヌさんの優しい言葉お陰で、私何度も励まされたいです。あんなこと言ってくれる人って、ジャンヌさんくらいだから……」

確かに、まく朗のコメントには返事を全部書いてきた。優しい言葉を書いた事もあるし、時には厳しい事も書いたこともある。それを彼女は、ちゃんと見てくれていたようだ。そういった良心を垣間見る事が出来たは私にとっては嬉しい事だ。しかし、それなら何でコメントはいつまでたってもあんな感じなのだろう？

「だから私、会ってみようと思ったんです。ジャンヌさんがどういう人なのか見てみたかったです。ちょっと不安だったけど……でも、来て良かった。ジャンヌさんが私の期待通りの人だったし、オフ会も良い感じになってきましたから」

「私もだよ……まく朗。皆にこうして会えた事は実に有意義な事だと思う。後の時間も盛り上がるといいな」

「あの、ジャンヌさん？ まく朗って何か変だし、私の本名言っちゃっても良いですか？」

「ダメだ。皆も黙ってるんだからまく朗で我慢しろ。後腐れするぞ」

そうですかと、まく朗は残念そうな顔をしたが納得したようだ。こついう場で素性を語るのは危険行為である。守るものは守らせるのが賢明だろう。こんなカワイイ子や、私みたいな美少女は、追っかけやストーキングされやすいと言うリスクが常に付きまどっているのだ。

「じゃあ、ここにずっといるのも邪魔になるし、戻ろっか？」

「はい……あの、一つだけいいですか？」

「ああ、いいよ」

「あの、これからも仲良くしてくださいね！」

私はそれに頷いて、すぐに廊下を歩きだした。

友達。そんなものは、この体に生まれ変わって今まで一人もいなかった事を思い出す。身勝手で残酷な子供たちに、私の心はついていけなかった。向こうも、私の異様に敏感だった。このオフ会のメンバーはどうなのだろう？ まく朗と言い、ジルと言い、私に近づく彼らは何なのだろう？ 信じる事が出来る人間たちなのだろうか？ 裏切らない人間なのだろうか？

いや、今はまだそんな事に焦って頭を悩ませる必要は無い。
今はこのオフ会を楽しめれば、それでいいのだ。

アカペラ大合唱（前書き）

まく朗の変人ぶりを見せ付けられつつ、会場に戻るジャンヌ。
会場は賑やいでいた。

アカペラ大合唱

会場の「十五夜」に再び戻ってくると、入口から歌声が洩れ聞こえてきた。

どうやら、ジルの話だとFOX老人が急に「お座敷小唄」を歌い出したのを皮切りに、アカペラカラオケ大会みたいなのが始まったらしい。私が部屋に入った時には頭に派手なバンダナをしたくまがつば君が、最近流行りのアニメ「トリアウト零時んぐ」の主題歌「さつぱり 学生服」を歌っていた。

それから、次々にメンバーが歌い出す。年齢層が広いため知っている曲もあったが知らないもの曲もあったなかなか面白い。ヘタクソな人もいたが、みんな熱唱していたので聞き苦しい感じはしなかった。

あの暗黒開闢魔王ルシファスも、細身からは想像できないビジュアル系ボイスで皆を驚かせた。

巻き起こる拍手と声援。生まれる謎の一体感。こういうのは、悪くない。

ただ、私は歌わない。音痴で恥ずかしい言うわけではないのだが、会のメインはどっしりと腰を下ろすのが良いだろう。かつては、聖歌を唄い、率先して兵たちを鼓舞したこともあったが、あの時と今は状況が違うのだ。物静かな美少女を気取るとしよう。

暫くすると、隣になつっこく座っていたばかりまく朗が、私の服を引っ張った。

私がどうしたのかと聞くと、まく朗は恥ずかしそうにこう言った。

「ジャンヌさん……私も、歌っていいでしょうか？」

「ん？ それは別に、こちらに聞かなくてもいいだろう。歌いたければ自由にすればいいさ。」

「本当に？」

私は頷いた。まく朗の歌声がどんなものかはちょっと興味深いからだ。

私の了承を得ると、まく朗はにっこりと可愛らしく笑った。

「わかりました、じゃあ頑張って歌いますね！ たんたんたぬきの替え歌！」

……えっ？

私は、脳裏にとても嫌な予感がよぎったので、とっさに立とうとするまく朗のスカートを引っ張った。

「ふわっ？ ど、どうしたんですかジャンヌさん？」

「まく朗、ちょっと、小さい声で歌ってみてくれないか？」

「うん？ いいですよ。えーと、たんたんたぬきのきーんた…んぐっ？」

それより後は歌わせまいと、私は彼女の口を覆った。
やはり、この者は危険すぎる。

「悪い、まく朗。他の歌にしてくれ。」

「……はい。」彼女は残念そうな顔をした。

「うんと、じゃあ、金太の大冒険でどうでしょうか？」

「それも、ダメ」

懲りないヤツだ。

何でか知はらないが、どうやら、まく朗は下ネタで売ろうとしているらしい。エロを前面に押し出すイケメン俳優もいるが、それとこれとは話は別だ。とにかく、野放しにはできない。このジャンヌダルクの面前でそのような破廉恥な言葉を口にするのは言語道断なのだ！ 全年齢層向けの小説で性的な表現をする事と同じぐらいの禁忌である。あつてはならない。

結局、まく朗には「おうし座 78」を歌わせることで事を収めた。

まく朗の歌声は、全部裏返ってヨレヨレだったので、私はくすりと笑ってしまった。

たぬきの歌を歌わせなくて本当に良かった。

ビンゴ大会（上）（前書き）

会も終盤に差し掛かる。
ジルが取り出したのは……

ビンゴ大会（上）

歌も一段落したところで、ジルがまた立ちあがった。

「えー、盛り上がっておりますとこそをすいません。これから、このオフ会の一大イベント＜ビンゴ大会＞を始めようと思います！」

そう言つと、女将さんが待つてましたと現れて、古臭い抽選マシンを持ってきた。

皆がそれに、おおと声を上げて拍手をする。ジルは、そんな彼らに一枚ずつビンゴ用紙を渡して行つた。勿論、私も貰つた。

「今回は、このジル＝ド＝レイが皆さまの為に沢山の賞品をご用意いたしました！是非ともビンゴしてくださいね！最初にビンゴした方にはなかなか素晴らしい物をプレゼントしますよ」

ジルも偉く奮発したものだ。

長らく会つていなかったのにここまでしてくれるとは良い人間だ、深く感謝せねばならない。やはり、人は見た目で判断してはいけないと実感する。

「ジャンヌさん。一等賞の商品つて何でしょうね？」

「何だろう？楽しみだな。まく朗は、何だと思う？」

「えーと、＜おしり型ヘルメット＞だったらいいなー」

まく朗に聞いた私が愚かだった。

確かに、それは聞いたことがあるがそういうものは「罰ゲーム」

とかで貰える品だ。

「では！」ジルが手を上げる。

「抽選スタート！」

ボタンを押すと電子音で「おら死んじまった」が流れ、電光掲示板の数字がチカチカ動いた。皆はそれをじっと見つめる。私も、景品が気になるので表示される数字は気になった。

「はい…… 36！」

会場で「よっしゃ！」とか「やった！」声上がる。

まだ始まったばかりなのにハイテンションだ。こう言うタイプの人間って何となく、途中でぱったりと運の流れが止まってしまいう気がするのはいのせいだろうか。

4
5

8

2
7

1
8

次々と数字が発表される。

しかし、私はまだ1つもビンゴ用紙に穴が開いていなかった。前世は運命に愛されたことがあった私も随分と見放されたものである。

「リーチ！」

そして、そんな私を尻目に早くもリーチしたものが現れた。
それは、カクガリの男<madara>だった。

「おお、遂にリーチが出ましたね！ でも、まだです！ 皆さん
頑張ってください！」

ジルはそう言うが、頑張れるところが1つも無い。全部運だ。
ただ、やっと1つ22のところに穴が開いた。まだ追いつける可
能性はある。

隣のまく朗を覗きこむと、彼女は既に4つ穴が開いていた。どう
やら運は良い方らしい。

手に汗握る展開は暫く続いた。ビンゴは、なかなか出ない。
しかし、その争いも23の数字が出た時、遂に節目を迎えた。

ビンゴ大会（中）（前書き）

白熱するビンゴ大会……
最初のビンゴするのは誰？

ビンゴ大会（中）

「ビンゴォ！」

会場がどよめく。
遂に一番乗りが現れた。

「おお！ 出ましたっ！ 最初にビンゴしたのはクワムラさんです！」

クワムラは、中年の女性だ。

チーターの絵が描かれた服を着ていて、大阪にでもいそうな感じの人だ。ただ、さつき通りがかった感じだと大須も結構そういうおばちゃん向けの服の店が多いから地元っぽい人とも言えるかもしれない。とにかく、そのおばさんがビンゴして立ちあがった。

「おめでとうございます！ 栄えある一等賞の景品は、ハワイ旅行です！」

え？

今、何て言った？

ハ・ワ・イ旅行おおお！？

これには私も驚きを隠せない。こんな小さなオフ会の中の小さなゲームの景品が事もあるうにクイズ番組で難問に次ぐ難問に正解した挙句にしかももらえない、あのハワイ旅行だとは。女将さんが封筒みたいなものを持ってきたが、あの中に入っているとは、全く信じられない話だ。嘘だったら承知しないぞと思ったが、クワムラおぼさんがすぐに中を見せてくれたので、それがどうやら本物らしいとわかった。皆がどっと驚く中、ゲームは続く。

「ビンゴ！」

2等賞は、小柄な青年<聖騎士ランスロット>だった。

スーパーチャルボーイ

商品は……SVB！これまた最新型の家庭用ゲーム機ではないか。私は、世の中には興味を無くしていたが、物欲は失っていない欲しかった。正直、ハワイ旅行よりこっちが欲しかった。貰えたら「テスガイア4」買ってしばらくゲーム三昧だっただろうに。実に、くやしい限りだ。それにしても、今回のオフ会の会費って確か2000円だったよな？私は免除されてるし、食事代だけでも足が出るような気がするが、もしかしてジルが全部自腹を切っているのだろうか？だとしたら、奴はとんでもない金持ちなのかもしれない。

3着あたりからは、やっと普通の景品になってきた。それでも、ミニ掃除機とか、鉛筆削りとかまずまずだ。しかし、さっきから女将さんが賞品を持ってきているが、タイミングが絶妙すぎる。ずつとどこかで、ビンゴするのを見ているのかと思う程に、ジルが景品名を言ったあとにすぐさま部屋に入ってくる。恐るべし……やはりこの女将、戦場でも活躍できるに違いない。

さて、私だが、やっとリーチまでこぎつけた。

隣のまく朗はWリーチなのに一向にビンゴしないのが可哀そうだ。

「ジャンヌさん！ お互いビンゴ出来るといいですね！」

「そうだな、まく朗。あまりいい賞品は望めないけれど、何かは貰って帰りたいな」

賞品も、ジルの言うところだと、あと3つを残すのみらしい。

いよいよゲームも終わりに近づいたということだ。まく朗にはあ
あ言ったが、正直もう景品にはあまり期待していない。十分楽し
だし貰えなくても良いかなと言うのが本音だった。

「では……次の番号は……10です！」

ビンゴ大会（下）（前書き）

ビンゴ大会も終盤。

果たしてジャンヌはビンゴ出来るのか！？

ビンゴ大会（下）

「ベンゴ……じゃなくてビンゴ！」

わざとらしく間違えたのは、まく朗だった。

リーチが早かった割にビンゴに辿り着いたくのは遅いと言っのはよくありそうなパターンだ。でも、最初にはしゃいでた者達は、私の読み通り、結局皆ビンゴ出来ていないことを考えれば運が良いと言えよう。

「まく朗さん、おめでとうございます！ 賞品は……プリプリ君クッションです！」

女将さんの持ってきたのは、遠まわしに言うと、こげ茶色のソフトクリームのカリームの部分みたいな形のぬいぐるみだった。正直、色といい形といいアレにしか見えない。まく朗はこれをおもちゃを買ってもらった幼稚園児の様に嬉しそうに貰った。

「ジャンヌさん、やたーです！ うれしいなあ、これすつごく欲しかったんです！」

たしかにまく朗が欲しがりそうなものだ。今日会ったばかりなのだが良くわかる。しかし、自分の欲しがっている物がこつも都合よくピンポイントで貰えたあたり、彼女の運はある意味神がかったいる。私としたことが、何だかちょっぴり悔しくなった。でも、この景品は絶対にいらぬい。

さて、これで景品は残すところ2つになった。

その1つも今、＜暗黒開闢魔王ルシファス＞が持って行ったのであと1つだけだ。

「さあ！ いよいよ最後の景品を賭けての戦いです！ 皆さん、最後まであきらめずに頑張ってください！」

だから、頑張りようがないんだって。

しかし、最後の景品って何だろう？ まさか、最後の最後にとんでもない景品がもらえと言うサプライズがあったりするのだろうか？ まさか……でも、ジルは一等にハワイ旅行を用意するような男だ。もしかすると……そう思うと、また少しビンゴに興味がわいてきた。

「では、次の番号は……」

おお。

おおお。

おおおお！

「……ビンゴ……！」

私は、平静を装っていたが。内心胸が高鳴った。

メインの人物が最後の最後にビンゴするとは何というドラマティックな展開だろう。会場からも拍手と、ジャンヌーと言う叫び声が聞こえた。

「流石はジャンヌーダルク！ 見事、最後に決めてくれましたね！ では、賞品ですが……」

こんなにどきどきしたのは、オルレアンでの切り返し以来と言っても過言ではない程久しぶりだ。さて、一体、何が貰えるのだろうか？

「おめでとうございます！ ジャンヌ様には、このジャイアントカプリコを差し上げます！」

女将さんに手渡されたのは、円錐型のチョコレート菓子一個だった。

ああ、そうだな。こんなものだよな世の中と言うのは。
まあ、このチョコレートは結構美味しいから別に嫌では無いし、帰ったら美味しく頂こう。

こうして、ビンゴ大会は大盛況のうちに幕を閉じた。
このオフ会もそろそろ終わりだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5281z/>

オフ会のジャンヌダルク

2011年12月27日20時57分発行